

葉月が、八月の別名であることは、みなさんをご存じかと思います。青々と葉を茂らせた、木の姿が見えてきます。

木は、光合成によって、自ら生きる為の養分を作り出します。葉の中にある葉緑体が、光合成の行われる場所になるのですが、葉緑体が葉の中に存在するだけでは、養分は作り出せません。

何か必要なのか？

ひとつは水。木の根から吸い上げられ、葉まで運ばれてきます。もうひとつは二酸化炭素。葉の裏側についている気孔という穴から吸収されます。

このふたつが葉緑体に入ります。しかし、まだこれだけでも養分は作り出せません。さらに条件が必要になるのです。その条件とは光。

葉緑体という場所があり、そこに水と二酸化炭素が運ばれ、光が当たることで、養分と酸素が作られます。養分は、木の全体に運ばれ、酸素は気孔を通して、排出されます。光合成は、さまざまな要素が、つながりあうことでなされるわけです。

仏教の教えに「縁起」があります。「縁起がいい」という時の「縁起」です。縁によって起こるという字の通り、すべてはつながり合い、支えあっているという教えです。

葉の中で行われる光合成は、この「縁起」の教えの通りの営みです。

そしてまた、排出された酸素は、動物が呼吸をし体内に取り込み、二酸化炭素が排出されます。それが植物の光合成に必要なものとなるわけで、ここにもつながり合い、支えあいのありようが見いだされます。

さて、今の暦の「葉月」は、緑の葉を連想させますが、「葉月」を旧暦に当てはめると様子が違うようです。

旧暦の八月は、今の九月から十月上旬にあたり、季節は秋となります。秋の葉は、色づき、落葉します。「葉月」はもともと、紅葉・落葉に由来する名前です。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

紅葉は、秋になり、気温が下がることで、葉への養分や水分の供給が止まり、赤の色素や、黄色の色素が作られることで起きる現象です。

そして、落葉。落ちた葉は、やがて分解され土の一部となります。土に帰り、木の養分となることで葉と木のつながりは続くのです。

木々の緑は、縁起の色といってもいいでしょう。そして、紅葉の赤や黄色もまた、縁起を示す色なのです。

「葉月」に、つながりあい、支えあいの「縁起」のありようを見ることができるでしょう。

— 終 —